

ほんとうの世界

— 自然からのメッセージ —

第一章

この世の天国

ねえ、みんな知ってるかい？

パラダイスのありかを

こんな時代の暗闇の中で

誰もが道を見失い

心を痛めている

でも、心配は要らないよ

君にもすぐに見つかるはずだから

心静かに

そっと耳を傾けてごらん

きっと聞こえるはずさ

天の音楽が

※ 20年ほど前に書いた文章ですが、息苦しいこの時代に、本質への道が開かれることを願って、計4回の予定で連載させていただきます。お読み頂けましたら幸いです。

音羽

しあわせのくに

鳥が鳴いている

木々が気持ちよさそうに枝を伸ばしている

人は皆悩みなくおだやかな笑顔で

幸せそうにしている

太陽がふりそそぎ

空はどこまでも青く

水はダイヤのように光っている

風が季節の匂いを運んでいる

その風を胸いっぱい吸い込む僕は

本当に幸せで

天に響く鳥たちの声が耳にこだまし

ただそれだけで

本当に幸せで

いつでもみんながこんな世界に

住めたらいいと

心から願っている



photo by Oroba

本当の世界を知る

この世界の秘密に気づいたときのことを、今でもはっきり覚えていてる。あれは、6年間勤めた最初の会社を辞めて、デザイン学校へ通っていた頃のことだ。

その頃は、デザインの本質を求めて模索していた。最初は、デザインとは単にモノの外見をきれいにするだけのものだと思っていた。ところが、偶然見つけたある本で、本当に人を幸せにし、より良い世の中を築くためのデザインとは、うわべをきれいにするだけではだめなのだ気づかされたのだ。

いったい人を幸せにするデザインとはどんなものなのだろうか。どうすれば人は幸せになることができるのだろうか。

デザインの道はいつしか人の幸せを求める道へと変わっていった。

同時に、どんなに年月が経っても古びることのない本物のデザインの中にある「何か」の正体が知りたかった。きっとそこに、求める答えがあるような気がしたのだ。それは、「美とは何か」という深い問いかけでもあった。自然の中にその答えを見つけようと近所を散歩することにしたのはそんな理由からだ。

はじめに、その秘密を教えてくださいなのは、当時三つになったばかりの息子だった。

ある日のこと、どうしても散歩について行きたいというのだ。貴重な一人きりの自然の中での瞑想の時間は、息子のはしゃぐ声でぶち壊しになるはずだった。

ところが息子の呼ぶ声で、これまで見ていたものが一体なんだったのか、改めて考えざるを得なくなってしまったのだ。

「ねえ、ちょっとこっち来て。」

仕方なしに呼ばれるまま歩いていって見た。彼が見せてくれたのは道端に咲いていた名も知らぬ雑草の花だった。

「ねえ、これ、ぞうさんみたいだね。」

確かに、それは紛れもない象の顔ではないか。

紫色した大きな二つの耳の真中から、真下に向かって細長い黄色いしべの鼻が伸びていた。良くみると、その可憐な花は、道のあちこちにひっそりと咲いているではないか。私は頭を「ガツン！」とやられた気がした。今まで毎日、いったい何を見ていたのだろう。

そう、見ているようで、実は何も見えていなかったのだ。

その時、息子から本当にものを見ろということはどういうことを教わったのだ。

それは「子供の目」だった。

物事を在るがままに見る目。何ひとつ色をつけず、何の先入観も持たない、ただ、あるものを在るがままに見る目。そのためには、自分自身が子供になりきる必要があった。

やがて見えてくるのは、子供の頃、誰もが知っていたはずの世界だ。

そして、少しずつ、自然はその隠された美を、私にも見せはじめたのだ。



photo by Otoha

花

花が咲いていた

いつも通る道なのに

はじめて花が咲いているのに気づいた

凛とした気品と野生の強さ

完成された美が心を捉える

花は

美しく咲いてやろうとか

他より目立とうとか

一生懸命がんばろうとかせず

ただ花のままにいるだけだ

そんな存在が勇気をくれた

疲れた心に

はじめて花が映った日のことだ



photo by Oroba



春の日

やわらかい春の日差し

はりつめた朝の空気

どこまでも透明で青い空

遠く霞む山々

鳥たちは歓喜の唄を歌い

木々は枝を大きく広げる

雪を踏む足音さえじゃまになり

いつしか歩みを止め

自然の音色に耳を傾ける

木の枝から音もなく落ちる雪の音

風と光のダンス

自然の奏でる交響曲（シンフォニー）

永遠の時空の中で

至福が体中にこみあげる

どうしてこんなに嬉しいのか知っている

母なる自然に抱かれ

“ひとつ” になれた悦び

ふたたび歩みを始めながら

自分の生きている世界が

この大地であったことを

思い出していた

この世の天国

子供の目で世界を見ることを知ってから、自然はさまざまな表情を見せてくれた。あるときそれは、葉っぱの上の朝露に映る虹の輝きだった。またある時は、雨上がりのくもの巣にびっしり散りばめられた水晶の水玉だった。草が踊り、鳥たちの声が別世界に誘って（いざな）くれた。それは、今まで何年も生きてきた現実とは、全く別の世界だった。

それから毎日毎日、飽きもせず同じ道を歩いた。とても幸せな時間だった。もはや、歩きながらデザインの本質について考えるような愚行はやめた。そんなことよりも、この自然の中で深呼吸することのほうが大切だと知ったからだ。

散歩の後半は軽いジョギングをするのが決め事だった。

ある日のことだ、走り始めてしばらく行くと、朝日の強い輝きが、梢の先端をかすめて目に突き刺さってきた。一瞬のうちにその真っ白な光に包まれてしまった。得もいえぬ幸せな感情が全身を支配した。走りながら、涙がこぼれ落ちた。なぜだかわからないままに、ただただ幸せだった。それは、心の底から込み上げるような幸福感だった。



ずっとその光が消え、まるで夢から目がさめたようにもとの世界に戻っていた。しかし、それが夢でないことは、はっきりしていた。光が消えた後も、心の中に、あったかいぬくもりが残っていたからだ。

いつしか散歩の目的は変わってしまった。あの正体のわからない光を求めて、というよりも、あのときの言葉にならない幸福感を求めるようになっていたのだ。しかし、何度同じように朝日に向かって走っても、あの時と同じ感覚を味わうことは決してなかった。そうして、月日だけが過ぎていくのだった。

何週間か過ぎた頃のことだ。もうあの光を求めることはやめにした。それは、求めて手に入られるものではないと悟ったからだ。そして、すっかりそのことすら忘れてしまっていたのだ。

いつものように歩き、いつものようにジョギングをした。最後の難関は坂道をダッシュで駆け上がることだった。これもその頃の決め事だった。息を切らして坂を駆け上がり、ハアハアと肩で息をついた。坂の上からは朝もやに包まれた雑木林が向こうの丘に広がって見えた。一息ついて、手を大きく広げ、胸いっぱい朝の空気を吸い込んだ。

だ。

そのときのことだ、斜めに差し込んだ朝日が、丘にかかる朝もやをスポットライトのように照らし出した。目の前の風景に息を飲んだ。薄れ行くもやの向こうに、朝日に照らされた梅の木の薄桃色が、雑木林の緑の中で鮮やかなグラデーションを描いて浮かび上がっていた。あたり一面が朝日に照らされ黄金色に輝く中で、立ち尽くした。草木の一本一本が金色に輝いていた。

今まで見ていたなにげない景色が、一変して息が止まるくらいの美しい風景になっていたのだ。まるでそれは、一枚の美しい絵を見るかのようだった。いや、それ以上に、言葉にできないほどのリアリティーがそこにあった。

時間は消え去り、永遠があたりを支配していた。そして突然、ある思いが強い印象を伴ってやってきた。

「天国はここにあったんだ。」

私は、心の中でつぶやいていた。そしてまた、あの深い幸福感に包み込まれたのだ。

そう、桃源郷は実はいつも目の前にあったんだ。ただ、そのことに気がつかなかっただけ。

そして、この思いが間違いないことを心に確信していた。あらゆる理由を超えて、それが真実だということ全体で理解していたのだから。

そう、この世がすでに、このままで、天国だったということ。

自然のままに

「自然に生きるって、どうすればいいの？」

木は教えてくれた

『僕を見てごらん』

ただそのまま、あるがままでいいんだよ。

僕たちは別に何かになろうとなどしなくたって

僕たちを生かしてくれる、この自然の力で

春になれば芽を出し

夏には花を咲かせ

秋には実をつけるんだ

だから、そのままの自分であるだけなんだよ。』

『そのまんまの

本当の君でいてごらん

それが自然に生きるっていうことだよ。

自然体っていうんだよ。』

その言葉に

無意識のうちに自分以外の誰かになろうと

—それは理想の自分かもしれない—

肩肘を張っていた自分に気が付いた。

なんだか少し楽に生きられる気がした。

今のまんまの自分でいいんだ。

ただ自然の流れに流れてゆけば

いつか花を咲かせ

実をつけられることだろう。

本当（そのまま）の自分であるだけで…

『そんなに急がないでゆっくりいきなよ！

自然のままに…。』

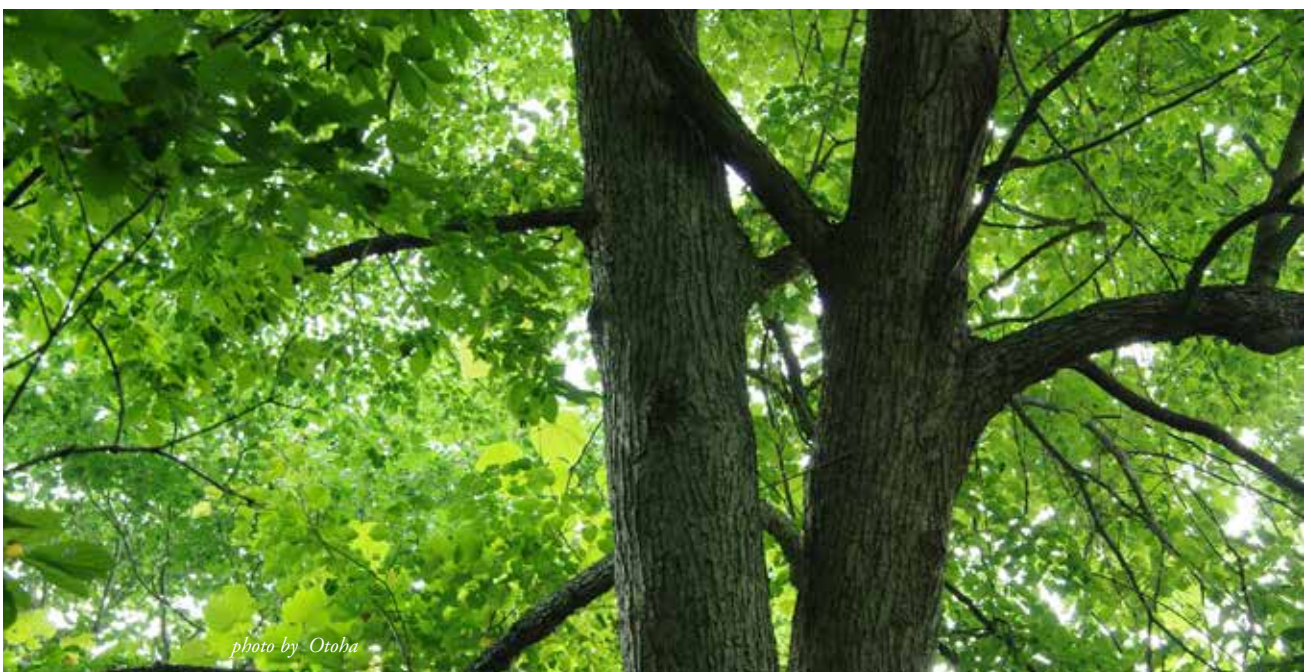
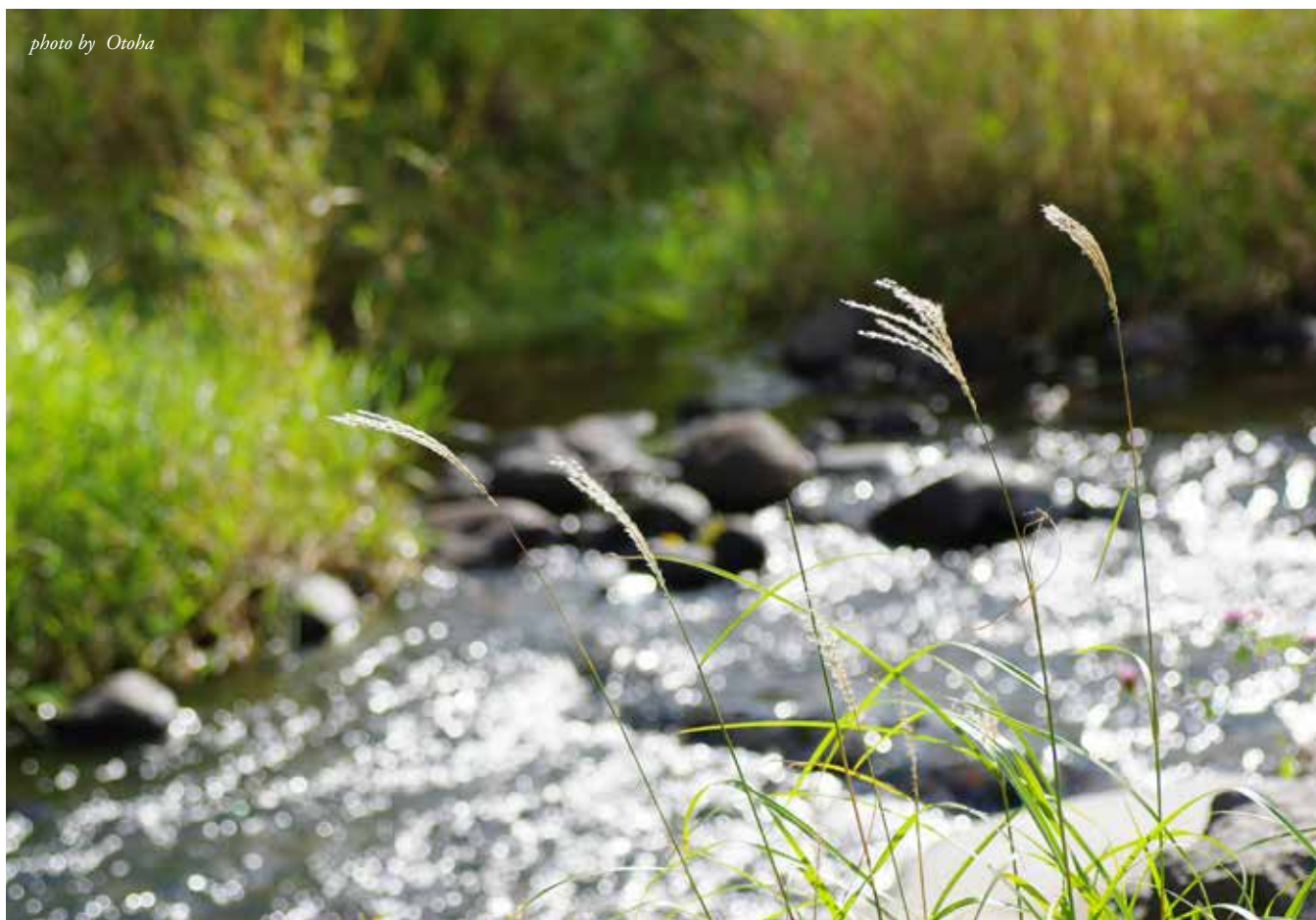


photo by Oroba

photo by Otaha



本当の世界

君は、本当はどんな世界に住みたいの？
君の今いる世界の住み心地はどうだい？
君は充分幸せかい？

心を全開からっぽにしてみたこの世界は
幸せであふれている。

とんぼ、みつばち、

草木や石ころ、

あたたかな日差し、

おだやかな時。

悩みも苦しみもない、

ありのままの世界。

哀しみがあるのは君の心の中だけでよ

雲の上で、

そらはいつでも青く

太陽がまぶしく輝いている。

君の望む理想の世界は

いつでもここにあるんだよ

そう、君のこころの中に